



Title	現代日本語終助詞の研究
Author(s)	中崎, 崇
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49209">https://hdl.handle.net/11094/49209</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	なか 中	さき 崎	たかし 崇
博士の専攻分野の名称	博 士 (言語文化学)		
学位記番号	第 2 2 2 9 9 号		
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語社会研究科言語社会専攻		
学位論文名	現代日本語終助詞の研究		
論文審査委員	(主査) 教授 仁田 義雄  (副査) 教授 小矢野哲夫 教授 三原 健一 准教授 堀川 智也 准教授 筒井 佐代		

### 論文内容の要旨

本研究は、終助詞を「話し手が聞き手に発話に託したメッセージをどのように処理して解釈すれば良いかを指示する」機能を担う形式であるという考えのもと、終助詞の機能記述と体系化を試みたものである。

この言語形式が発話解釈の指標を示すといった考え方は、言語表現によってコード化 (encode) される情報には、基本的に 2 つのタイプが存在するという、Sperber and Wilson (1986) (1995) によって提唱された「関連性理論 (relevance theory)」の考えに基づいている。

2 つのタイプの情報とは、概念 (概念表示) とそれら进行操作する手続き (概念表示の操作に対するの指示) である。概念的情報とは、「cat」「tell」「tired」といった名詞、動詞、形容詞などの内容語の大部分によってコード化されている、発話の概念表示の構成要素となる情報である。手続き的信息とは、「so」「after all」といった談話連結詞など、概念表示の構成要素にはならず、聞き手が発話を解釈するにあたって、概念表示をいかに操作し処理するかについての指示を示す情報である。

本研究では、終助詞は、この 2 つのタイプの情報のうち、手続き的信息をコード化した言語形式であると考え。つまり、終助詞を聞き手に対する何らかの発話解釈への指示をコード化した形式の 1 群と考える。また、形式の異なりは、発話解釈への指示の異なりを反映していると考え。

考察の結果、本研究で扱った 7 つの形式は、それぞれ以下の表に示す基本的機能を有していることが明らかとなった。

表 1 本研究で扱った 7 形式の基本的機能

形式	基本的機能
「よ」	当該の発話に基本表意以上の意味が存在することを明示する
「ぞ」	「～と認識している」といった話し手の命題に対する態度 (命題態度) を明示する
「ぜ」	「～と認識している」といった話し手の命題に対する態度 (命題態度) を明示する
「わ」	「～と認識している」といった話し手の命題に対する態度 (命題態度) を明示する
「とも」	当該の発話が文脈から推論によって導出可能であることを明示する

「さ」	当該の発話がこれ以上推論し展開する必要のない発話であることを明示する
「ね」	当該の発話によって示された想定が話し手と聞き手との間で相互に顕在的であることを明示する

上記の考察の結果から、終助詞はある1つの本質的な機能を共通して有しており、その機能によって1群としてまとまっていると結論づけられる。その機能とは、その形式が付加された発話に基本表意以上の意味が存在することを明示することである。

表2 終助詞の機能

終助詞の機能	発話に基本表意以上の意味が存在することを明示する
--------	--------------------------

「ぞ」「ぜ」「わ」は、それぞれが有する派生的な機能は異なるが、3形式とも「～と認識している」といった命題態度の存在を明示する機能を有している。このような命題態度動詞を目的節として埋め込むことによって得られる意味は「高次表意」であり、基本表意を発展して得られる基本表意以上の意味である。

「とも」「さ」「ね」は、それぞれの機能で明示された発話解釈の方向性で当該の発話を解釈することで、派生的な想定を導出させる。この派生的な想定は、当該の形式が付加された発話の表意と文脈との相互作用により導出された想定であり、推意である。この推意も基本表意以上の意味である。

「よ」は、基本的に平叙文、疑問文、命令文といったすべての文タイプに付加され、その付加により導出させる意味も、「～と述べている」といった発話行為動詞を復元した高次表意、「残忍に思う」といった命題態度動詞を復元した高次表意、推意とさまざまである。しかし、こういった意味も、すべて基本表意以上の意味である。

このように本研究で終助詞として考察した7つの形式は、当該の発話に基本表意以上の意味が存在することを明示するといった共通の機能を有していることがわかった。また、終助詞の個々の形式の異なりは、明示する基本表意以上の意味の異なりであり、基本表意以上の意味の導出の方向性の異なりであることも明らかとなった。

このような機能を有する形式が、対話場面など聞き手が存在する場面で意図明示的伝達に用いられた場合、聞き手に当該の発話の基本表意以上の意味を導出して発話解釈を行うよう促すこととなる。本研究の考察の観点である「話し手の聞き手に対する発話解釈の意図」から、この機能をとらえ直した場合、次の終助詞の発話解釈への指示機能が導き出される。

表3 終助詞の発話解釈への指示機能

終助詞の発話解釈への指示機能	発話を基本表意以上の意味を導出して解釈することを促す
----------------	----------------------------

上記の機能を発話の関連性という点から厳密化すると、終助詞の付加による発話解釈の処理コストに見合う発話の関連性を達成するために、発話を基本表意以上の意味を導出して解釈することを促す機能となる。また終助詞の個々の形式の異なりは、指示される発話解釈の方向性の異なりである。

本研究で規定した終助詞の機能の考察から、終助詞の付加要因についてもつぎのような結論が得られる。

まず、当該発話に基本表意以上の意味が存在しなければ、その存在を明示する終助詞を付加することはないため、終助詞の付加要因は当該の発話に存在する基本表意以上の意味の存在と考えらえる。

表4 終助詞の付加要因

終助詞の付加要因	当該の発話に存在する基本表意以上の意味の存在と明示
----------	---------------------------

またこの付加要因を発話の関連性という点から厳密化すると「基本表意以上の意味を導出して、発話を解釈することでより高い関連性（認知効果）が得られるといった話し手の想定が存在」となる。これを、本研究の観点から規定し直すと、次のようになる。

表5 発話解釈への指示機能に関わる終助詞の付加要因

終助詞の付加要因	当該の形式によって指示される発話解釈の方向性で、発話を解釈することでより高い関連性（認知効果）が得られるとの話し手の想定が存在
----------	---

この規定から、さらに終助詞の付加が容認されない要因も導き出される。終助詞の付加が容認されない、不自然となる要因は、終助詞の付加による発話解釈のコストに見合った関連性（認知効果）が当該の文脈から見いだせないことと考えられる。左記を厳密化するとつぎのようになる。

表6 終助詞の付加が容認されない要因

終助詞の付加が容認されない要因	当該の形式によって指示される発話解釈の方向性では、形式の付加による発話解釈の処理コストに見合った関連性（認知効果）が得られないこと
-----------------	---

以上、本研究は、終助詞の機能を「話し手の聞き手に対する発話解釈の意図」を示すといった単一の観点から考察を行った。そのおかげで、終助詞の類としての共通する機能を取り出すことが可能となり、その機能から終助詞に共通する付加要因を導き出すことが可能となった。これらは、本研究の大きな成果である。

### 論文審査の結果の要旨

『現代日本語終助詞の研究』と題された本論文は、現代日本語を対象にして、終助詞に属する諸形式の意味・機能を詳細かつ包括的に考察し、その体系的・組織的な記述を行ったものである。本文だけで、四百字詰め原稿用紙に換算すれば約 800 枚の大作である。具体的には、「よ、ぞ、ぜ、わ、さ、とも、ね（な）」の諸形式を扱っている。これらは、終助詞として従来扱われたことのある諸形式のうち、その中心に位置するものであり、用例数や使用域などからして終助詞としての典型で代表的な存在である。またそれだけ逆にその意味・用法を明示的には取り出しにくかったものである。

本論文の優れたところとして、1) 豊かな言語事実の掘り起こし、2) 新しい提案を含むきめ細かく包括的な観察、3) 体系的で一貫した分析・記述などが挙げられる。

豊かな言語事実の掘り起こしは、当該研究が優れた文法研究になりうるためのまず基本的な要件である。従来気づかれずにあった言語事実・言語現象の指摘は、それだけで新しい知見・世界を提示してくれる。通常その規則性が無意識下にある母語の場合であれば、そのことはなおさらである。本論文は、多くの多様な事例を採集し、それを元に分析・記述を行っている。そのことがまず本論文の質を保障している。

たとえば、「よ」は、「話し手側に情報があると見なされる場合に使われる」「付加された文の内容を聞き手に押し付ける・主張する、また聞き手が認識すべきであることを示す」機能を持つというふうには、従来分析・記述されているが、それに対して、「(髪の毛をセットしている人間が) あーん、もう、また(髪が) はねてるよー」のように、聞き手を想定しない独話場面で使用している例を挙げているし、また、疑問文での「よ」の使用は、疑問文を情報要求から情報提供にずれ込ませる、という従来の主張に対して、「どうして私の写真を撮らないのよー」のような例を提出している。さらに、「ぞ」は丁寧体とは共存しない、と従来言われていたが、「わたしの変装を見破ったのは先生がはじめてですぞ」のような使用例を挙げ、従来存しないと言われていた特殊な例外的な事例を提示している。存しないとされていた使用例の掘り起こしは、それだけで従来の通説を訂正し、有すべき説明能力の拡大した分析・記述を準備することになる。

優れた研究であれば、従来にない新しい提案を含み、きめ細かく注意深い包括的な分析・記述を目指すものである。

本論文も、きめ細かく包括的な分析・記述を試みている。包括性については、従来の研究が形式により対話・独話のいずれかに偏った分析・記述が多かったのに対して、本論文は、考察形式の全てにわたって、対話・独話双方での使われ方、それぞれの意味・機能を考察している。さらに、各形式全てにわたって、共起しうる文タイプ全般につい

での考察を施している。たとえば、「よ」と「ぜ」「ぞ」を比較・対照して、(1)「よ」は全ての文タイプに後接する。(2)「ぜ」は、「ぞ」と同じく、基本的に平叙文にのみ後接するが、ただ、勧誘のシヨウ形への後接は、「ぞ」と異なつてさほど特例ではないことなどを明らかにしている。

また、各形式が使用されるケースのみならず、他の形式とも対照させながら、使用が不可能になる使用制約の取り出しに心がけている。たとえば、「とも」の使用には、先行発話や何らかの状況の存在が必要になるのだが、それだけでは使用制約を十分には捉えきれず、[A「お名前は？」／B「??山田太郎ですとも。』]、[(見知らぬ B に問いかけて) A「バス、来ました？」／B「?ええ、来ましたとも。』]のように、発話時に新たに獲得した想定や事態を表すことはできない、ということを明らかにしている。さらに、[A「君、ラクビー好き？」／B「僕、ニュージーランド人だよ。』]、[A「君、ラクビー好き？」／B「?僕、ニュージーランド人さ。』]などの例を挙げ、このタイプの文連続における「さ」の使用の不自然さは、「さ」の、「当該の発話がこれ以上推論し展開する必要のない発話であることを示す」という機能から説明されている、としている。当該の形式が使えない状況を明確にするということは、使われる状況を分析・記述する以上に難しく必要なことである。そのことからすれば、本論文が各形式に対して心がけている使用制約の取り出しは、重要で評価すべき点である。

きめ細かい注意深い観察としては、対話状況で使われ、同じように見える「とも」について、(1) [A「元気出せ！ 飲め！」／B「飲むとも。』]、[(阪神ファンの) A「今年はどこが優勝すると思う」／B「もちろん阪神だとも。』]のように、聞き手が提示する事態に対して同調・同意する状況での使用と、(2) [A「あるんですか、そんなもの？」／B「あるとも。』]のように、聞き手の発言に対して反論する状況での使用とを取り出し区別している。

従来の終助詞についての研究は、少数の形式を取り上げ、ただかそれらと比較・対照しながら、個別形式の意味・用法を取り出すといったものがその中心であった。またほぼ終助詞全体を見渡した考察にあっても、各形式の意味・用法は概括記述の域を出ないものであった。その意味で、一つの枠組みで多様かつ多数の実例を包括的に分析・記述した本論文のような研究は皆無であった。

本論文は、終助詞の意味・用法・機能に対する分析・記述の枠組みとして関連性理論を用いている。明確な分析・記述の枠組みを用いながら、理論を単に当てはめるだけでなく、豊富な実例を丹念にきめ細かく分析・記述することを通して、各形式の意味・機能を明るみに出すことに努めている。その意味で、本論文は理論と記述の双方を併せ持つ考察であると言えよう。終助詞全体の機能を、話し手が聞き手に託したメッセージをどのように処理解釈すれば良いか指示する機能を担う形式、発話に基本表意以上の意味が存在することを明示する形式と捉え、各終助詞の基本的な意味・機能をまず設定し、さらに要因への配慮を行いながら、要因の作用によって生じる意味・機能を取り出している。その意味で体系的・組織的な分析・記述が行われていると言えよう。

ただ、個々の終助詞の基本的機能として取り出しているものと、それぞれの終助詞の具体的で多様な意味・用法・機能との間には、少しばかり距離があると思われる。その間を埋める説明があればもっと良かった。

しかしながら、これらは望蜀の感のある要望であり、今後に残された問題が存することは、研究の宿命であり、本論文の価値を損なうほどのものではない。

これらのことを総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が博士(言語文化学)の学位を与えるにふさわしい論文であると判断した。